絶

新刻三體詩

一

和州三輪詩巻之二　　みを井蒐印述

送隠者ヲ居云ふ郡姓名

許渾　字ハ用晦　丹陽名族　丁卯集

世ゝ婚姻路茅茨（シヤウ）

世婚の姻路ハ隠者を公よ茅茨とる人なきを枝折（シヨリ）なきに係る比して云茅茨ハ茅の茂りしほ貞雲林ハ隠士ゝ居所

自古（イニシヘ）雲林遠市塵

公乃（クルハ）世間（ニタ）惟白髮

公乃ハ私なきを云人を知つるのよりひ富貴位のものゝ〜みゝこゝる位也

老人（ヲイビト）部上（ニモ）不蒙（ラ）饒（ニギハヒ）

詩意　むゝ〜仙菜の和軍。凡史よそれ〜ゝ風時親き菜の陽所安。仙のよ。山人ね軍の位よ登王。なびゝめ茅ぬしなりけれど。山菜人。威勢よおそき。姫ゝく山中にかゝれゝ。ね宮ゝ山人の行歩を位治へど知る人

ゐしゝ。年月は経ぬれど、なほ山路の苔むすびぬ。はるゝ〻を入る時ひけばぬ。岩の流を汲上げて、さらぬ雑水といふ。爲を焼て、いまだ風俗の烟をのぼせず。招寺中立の石に掛かけ、先ッ案内をぞ志めしける。居士歩を運き。苔石の巻を掛ひ、まきらに君は迎へ、まる。例のさとしに物を今座のまを。

三の間のみを管こ。初春の白を切て、霞の巻を

掛し。件の白湯は、きりく。載の巻の湯を、掛しう。

君むし〻の物語を。滝しゝ、はは出させ、富士の巻にも。

只ゆるさめ白姫ぶ、ぶ。拓郎中とれをめし。居士が

居見は、しゝやこ語ひ。還郎一語ひしうとや。

送宋主女士飯山 宋主女士ハ和歌名 主ハあるる語を

賣茶翁琴ノ飯去「送」

山風吹尽桂花枝

一の白山中より彩市に出ふるを迎韵字延の字長ノ歯云うして妙二の白山中の遥日中を云桂花枝ハ仙宿の住しを云ハ桂枝の花と云るゝ韵字枝の字住と離る様にけざし招居よりしづく居士のるに見も中沿一説桂花附と云こゝ竹〻こ住さまを

をこゝ〻仙宿の住を高人自新ゆ高高して附のまゝ弱ゝ風とゝ〻ゝ竹ゝのゝ

世間甲子猶更多

遥宿仙人莫看棊

世間甲子ハ九住る俗縁七人も七十又四百年ゆ甲子之暫附ハ四ときと云るゝ仙人の棊云晋の王質が棊ゆ甲子ゆ招ゆ居ゝ〻ゝ二の白ハ住石の花裏を迎住白ハ延ゆ仙棊とゆめて二ゝ〻び彩市ゆ出る附住去ゆを對白ゆ行ゝハ住るゝと欲きゝ迎ゝ

詩意 むゝし独用法師。古芳紙と云而ゆ引ゝ〻ゝ遥ゝ

故ゆめて。新き仏の巣しゝ云。友人の作を夢宿とさゝめ。

滝し托神しゝて山ゆ仏ゆ。友人の座ゆ一ゝとの稲

ゐゝ〻ゝ花住ゝ〻ゝ。古芳紙を拾ゝ。巻ゝ住

こゝろぱせりとに中どう。敬果くのらくとの古事紀を爲。
されど西方のもの。八重の塵を拭かゝく教ふ。ぱ友人
は行ふ。秋月冴かさら。秋ハ七生の響ひなり。公と笑
る日も久しかゝらじ。ものかゝらふうに。ぱ友より秋月
をそうく失ふう。死なゞとき人ハ如是て降る人の
さ秋ものら日行ぶる例。せうしもかゝらじとう。

秋思　低人感老の情を述

杜牧　付花前ヨ

楚樹西風花似雪秋
楚樹は楚国の樹一の白菊より秋月冴かゝく法を感ずる初秋の色
楚雲湘水怪同遊
楚雲は巫山神女の石ヨ湘水ハ娥皇女英の去る所ヨ合く古人と同行しる
ハ行ふ。ぱ女ぱ女と同行しる
るとぱして述ふ所

高歌一曲掩二面啼一

時日ハ少くまゝ今ぐ白頭
面涙まこゝの流ハ行ぐ先を触るのこゝろ結句ハ若き時ハ気つくしてかくの
つくのふなりつくにを書してくれる形を知ぞるの情を述

詩意　涼風訊こと寒里。二星ぞやうに法を動を。
前夢の秋情ぐしにハ。うゝ女の森海をとゝ。海世
ぱ産のとでうんにを。抱女の膚ぱ去こぷ。さきふ
さにわりひ乱れ。ぞこう寝ぐらにぐどうむ夜なき
るぱうこう。一向に秋ぱ高ぱ。手に似合ぬ小。秋
のはそう。一曲たりぐ風よ。声ものづう弱うく。
先を泡ぐ新ふ中ぱ秋ものくぷひのせきくぷとぱ。
被ぱ掩ふ若うう一時ハ。ぱくくハなうう一ぱと。
急情の裏こ風るを。ぱのうしと述ふ所ぱ。うう人の

心し。低云の情をあらはすべし。

莫陵廟

清沢よいつ〳〵姫宮女英
二妃の廟

李遠

字ハ求古始教盛城一附秦信ヨ楊妃ガ機一両ヲ持ル孫畢一
て又好ノ者李群玉校書ヲ以て自称清者也と称ス
反賞陵廟ヲ訪ヘ動雲雷雨しあり遠日僕自獲清渡
所玉舟一見ル赤崖ヲ不生ル巷ヲ一ハ話ヲ次ハ李群玉ガ作
李を盛城ヲ李群玉ヲ人ヲ李遠ヲ李遠ヲ李群玉ハ作
リ所詩ヨリ名ヲ李遠ヲ本集の作ヨリ李遠ガ一李
群玉ガ作ヲ行〳〵

莫陵廟前苔蘚春

苔蘚ハ寂寞ノ苔ヲ云別名ヨリ一述異記曰むう一殷国の付魏国若秦雅有
氏後徳役ニ不返ヲ書思之既喪ヲ保の上に生ス木ヲ用くお思本とい形如有作
人呼ヲ名ヲ寂寞苔ヲ李群玉ハ中ヲ見る時ニ妃の廟の名三篇を記ヲ詩ヲ三篇
才三の名ヨリ莫陵廟ヲ李氏室ニ子紀常盛ス春風ニ不知精爽所の処ヲ魂生ル雲
秋ヲ中しと云詩今篇改めんと中ヲ詩ヲ二妃ヲ一ハ詩ヲ李群玉ヲ人ヲ李群玉ヲ
と感ヲ自ヲ禁ヲ〳〵〳〵ヲ家陵ヲ〳〵ヲ卒ヲ段成式詩ヲ所の変ヲ〳〵ヲ李群玉ヲ
して後哭ヲ詩ヲ残ヲ詩ヲ段ヲ〳〵ヲ生ヲ詩ヲ段ヲ〳〵ヲ〳〵ヲ
虞舜の葬陽侯ヲ〳〵ヲ莫陵ヲ妃ハ廟ヨリ〳〵ヲ仕女ヲ〳〵ヲ苔蘚ハ仕女ヲ〳〵ヲ

黄陵女兒黄裙新

赤きと云ふ黄ハ白ヨリ〳〵ヲ列ヲ

浮丹雘梅唱歌云　水遠山長愁殺人

浮丹雘ヲ二地ヨリ今て別ヲ惜ヒ心ヲ〳〵ヲ無数ヲ〳〵ヲ和信人ヲ〳〵ヲ
和漢異ヲ今ヲ〳〵ヲ人ヲ〳〵ヲ数ヲ〳〵ヲ詩ヲ〳〵ヲ列ヲ

彈箏人　風俗通云箏ハ秦声ヲ蒙恬ガ所造ヲ伝築声ヲ

一箏ハ留莹切

温庭筠

本名岐字ハ先ハ
のち改ヲ筠ヲ

天宝年中事玉皇

天宝ハ玄宗の年号玉皇ハ玄宗の兄ヲ〳〵ヲ寧王ハ玄宗の兄ヲ〳〵ヲ
舞ヲ〳〵ヲ演列の俗制彩曲曰演列一ヲ曲ヲ〳〵ヲ
うれを石信いとく信君を侯ヲ〳〵ヲ人ヲ感ヲ寧王ヲ
とせるの雷ヲ〳〵ヲ〳〵ヲ〳〵ヲ〳〵ヲ三牛四の石孫山ガ乱ヲ起ヲ寧王ヲ

細柳金屋皆零落

細柳金屋ハ箏の飾り之の白ヲ〳〵ヲ箏ヲ〳〵ヲ箏も彩曲ヲ〳〵ヲ
〳〵ヲ〳〵ヲ云伊列ハ中ヲ〳〵ヲ一耳一無一の〳〵ヲ曲の名
〳〵ヲ〳〵ヲ〳〵ヲ〳〵ヲ〳〵ヲ〳〵ヲ

一曲伊列清萬行

詩意 承和年中。掃部頭貞敏といふ人もろこしに渡り。廉承武と云ふ博士に三曲を習ひて。帝におしへまゐらす。其後應和の比ほひ。村上の帝。三五夜中の新月白く冴(サエ)。涼風颯々たる夜半に。帝(ミカド)。玄象(ゲンジャウ)を遊ばしけるに。時に影のごとくなるもの。帝に奏しけるは。我こそ唐の廉承武が魂なるが。三曲の中。上玄石上の一曲を秘しけるがゆへに。今にいたるまで。魔道に沈淪(チンリン)せり。願くは此曲を君に授け奉らんとて。清涼殿の青山(セイザン)にて弾じけるとぞや。是より君も臣を。思はれさせ給ひて。つゐに御室(ヲムロ)へ下されし。平治の乱に。[illegible]琵琶法師の。青山の琵琶をうけられしが。二たび[illegible]ぞ返し侍る。

韋曲

韋杜の二曲は長安に在る所の名

唐彦謙 字は茂業 咸通の末より中和の[illegible] 表は中從事に歴し [illegible]

欲ㇾ写ニ愁腸ヲ一愧ニ不才ヲ一 多情練漾已ニ低摧ス

愁腸は[illegible] 不才は[illegible] 多情は[illegible] 低摧は身ふしの砕けるほどく云ること

窮郊二月初テ離別ス 獨リ傍テ寒村ニ嗅グ野梅ヲ

郊は城外と云ふ初離別は[illegible]と思ひしに二たび別るる[illegible]と云ふ嗅野梅は[illegible]

詩意 なげきの別れは。切にしてたえかぬる方なし。其外の人に[illegible]。されど[illegible]常の愁は[illegible]別れ[illegible]にをかしとおもふ[illegible]みな沈める

時はいづれの透(スキ)写(く)をら迷ん。いそれそいふに掃されけりと
おぼ。作者の元稹。韋曲といふもとて二月のころやみを
まゐし。宣義之ら梅花の紅なりまそぞが
見む。かなしくおもひし家里によせて。梅を鎖とる
いふ。結句一の句の首尾を合す。

曲江春望 西京雑記ニ京城龍華寺の南ニ有流水屈曲 謂之曲江と 秦漢唐ニ名を改ム 曲江ハ唐の名 寰宇記ニ水似広陵 曲江かくらるゆへに名づくとの事

杏(キヤウ)麹(エン)桃(タウ)嬌(ケウ)奪(ウバフ)晩(ニ)寵(ヲ) 楽遊苑(ヒヤウ)廟有(リ)余(ニ)華

杏麹――ハ曲江の景気を云 禾摠花 秦ニハ宜春苑 唐ニハ曲江と云 楽遊廟ハ漢宣帝の廟を築く所を云 漢ニても栄華ハ花のちるよふに所くうつりかはる変せ
し承造化を云

漢(カン)朝(テウ)冠(クワン)蓋(カイ)皆陵墓(ホ) 十里宜(キ)春下苑花

冠蓋ハ冠を戴く官人の傍と云 並ニ栄華の者 陵墓ハ荒廃と云ことを 墓となりくちはてるを述 宜春苑ハ秦の時の名 今全篇ニ秦漢唐の三代まとに荒廃を述ぶ

詩意 杏麹桃嬌にてもの曲江のさかりなりし。杏麹桃嬌ならび
やうにて春の物景を集て。事去り時移りて。楽遊
廟も其果。只今のうつり替るのみぞ哀れなる。漢朝の
帝。親王百官をしたがへて。古き墓のこ
春ゆ草生茂り。十里にかゝる宜春苑もむなしく
むなしく荒廃なり。

鄴宮 魏の時ニ建之銅雀台ハさらにかはり世ニ称ぶ銅雀台の瓦 号鄴瓦 石氏慕容氏高氏こゝを居とす 石氏ハ石季龍がことに 此詩石氏が花を述

陸(リ)亀(キ)蒙(モウ) 字ハ魯望 呉の人 居ニ松江甫里 著ス書ヲ 一万巻 通ス経ニ 号ニ江湖散人 一ニ 性嗜ム茶ヲ

花飛蝶駭不愁人　水殿雲廊別置春

一の句ハ花ちるをちるとも思ハず面白く遊ぶ事を云
二の句ハ石氏が富貴を云

曉日靚粧千騎女　白櫻桃下紫綸巾

石氏常に美女千人を侍らせてうつくしく粧ひ作りたる事を云　騎ハのりたる事
ゆゑにかくいへる也　多く美女を侍らせて花見に出たる事なり　千人の女と云てハ面白からず
白櫻桃ハ其中に多く植ゑしる也　石氏が寵愛の美女鄭櫻桃と云
是を含んで紫綸巾ハ美女の髪を包む巾なり　婦人常に綿帽子を被る
の類ひをいふなるべし

詩意　遅き日のながれに暮るれど。蝶は何れも遊び
あそべるより驚きて面白くおもひなれども いひだすべきもなき
なか風に桃の綻ぶ夜の明けたるも何となくしとやかにして
白らけて浮かれしがもまいりてせざれて 臥く風
胡蝶もすずしく悟ける氣色。櫻のくり風情あるもさまり

に雲に入るまでに近き夜つくりけるにハ ぼりし眉ある
繊月は並べ。崖上の崖づくりにハ乙津乙女の雲
の枝を轉して ひとつる事をも覆りばぐ 出仕なしつ
人に時は論じけくに化粧に光は争ひ。其のしめ
新の目にきしめきたく。千人の勢ひ。柳櫻をこき
まぜくぐらし帽子の紫にハ。紅の桃の影も映し。

閩郷卜居　地理志に陵州閩の徐ハ去ル四百七十里之居ハ楚辞
卜居の名是よりいづ

呉融　字ハ子華　越州山陰の人也
書記となる

六載抽毫侍禁闈　可堪羸病決然歸

一の句六年書記の役を勤るを云　禁闈ハ禁中也　二の句病氣づよすぐれぬに別を極め
去て閩へ歸る

五陵年少如相問　阿對泉頭一布衣

少陵ハ家をさして旅中ゆゑ人を云上ハ何ともなき体のうつけたる心
何将軍ハ故に長安より一布衣ハ平生の衣服

詩意 帝のため右よなさく。なふはのよし何よつけて。我
ごむを支載よ撥られ。六年禁中の宮き事に宸て。指
病の霜氣寸白日夜よ長し。我が何りてこそ名利於ち
貧れしかど。志きられ捨て我よ帰る。けふりの美き衣。
めし我よ於何語りて。何将軍の水辺にて。田子の
ごとく我欲し。いやしき賎乃おれの衆よ於く
作るといふる也。

尤渓乃中　尤渓縣ハ東南歙州ニ

韓偓　字ハ致堯京兆万年の人。礼部侍郎より兵部侍郎翰林
学士となる。朱全忠をとにらむ。濮州の司馬に貶せらる。
帝汝をかへして日るを召に人の為せなふ敢て入らず。閩の王審
知に依る。卒す。

水自潺湲日自斜
尽無鶏犬有鳴鴉

韓偓乱後に王審知が所へ行く年の作也。潺湲ハ水の流るゝ自然なる音。
乱後に人なきと云ることを云ふ。下の句之鳴鴉ハ七月さ

千村萬落如寒食
不見人煙空見花

落ハ村落。寒食ハ火を禁ずる日の事。人烟を見ずと
いふ事也

詩意 きのふまで大勢の陣よ命於争ひ。今ハ於とろへも
生田川のむなしき川のみぞ流れける。流れ中西沢戸。
こし吉野よ燈られ。梁の鶏もなけれど人志よ
年ふたの声もなし。只一の谷よ侍ふ旅かりて日ハ
西山よ傾おて。夕於おさ山里の煙もなし。春はわたる
神戸若木の桜。只是のみぞ何りけるなる。

丹陽送韋參軍　丹陽ハ潤州よりいふの地名ぞ　韋ハ姓參軍ハ官の名

叢維　字は文四　越州の人

一別心知兩地秋

冊陽郭裏送行舟

心知は心友知音の義　両地は一所と別しての義　秦軍が彼方歳信が
ミ国る処と云

日晚江南望江水

江南江水は南地のそ尾水流くハ
七流の良い

元稹　字は微之

詩意　四国中出る位けるの事ふとする空遠くて
はるれなき夕言うけく我宿は立ぬ一三里位
隔て秋深くして無ち。まだ枕寝ぬ
如波の波形者。月色は見よう外をなれらしぞ物のる。
親しき友をおどろ物語よ遠ち。夢面はつ出て
とらつく。なにあ地の影は月沒よ帆を

ぬげて。秋楊柳は
面もそれみく。暮よ近て春の色ろ
多みぐ〜。

寒食　清明の前の二日を寒食と云　一説に八分の日　一説に八分の日
拾伝とのれく宵鶯上山はかり風もと来れれ寒雪く山を
やく折れ立つのに出てして十日死を後人嘆くと物ハを拾ぐ
よつく冷会を知る文人会と名つく又一名熟食　又説去年
里ハ方と日に心ハ物ち史懽ち史故よ禁を有両説

韓翃　字は君平

春城無処不飛花

寒食東風御柳斜

春城は寒食ときも一の名清明の時表を述所柳は文の柳之御柳宮柳ともぐ
柳宮殿の熟ウ也　又後世柳柳をこきまぜて柳ハ春の柳ともく和漢同さく

日暮漢宮傳蠟燭

青烟散入五侯家

漢文は唐よりも前まもの漢の代よりはるぐ五侯は漢ようの唐又漢よ国しか位三
家し今番は作ると云んの方人物ちく〜ぐ〜ぐ〜ぐ〜

さ雨を君の寵を失ひの家に出て経りし出郊にめつらしく、うや、雨さまよ
を好しき心を述ふ。今全日なきかし剛をまふ寂寥剛を山田の宮出るを
牛る雨木のおひ枝死るる時外まで内まねしかた三日の宴会を此方宴会の
例にもきかれ

上陽宮　左京ト洛城ノ外ニ武后此之所にあし

竇庠　字ハ胄卿黎州の刺史なり

愁雲漠々トシテ草離々　太液勾陳處々疑フ

愁雲ハうれしきくもを漠々ハ哀其の貌、離々ハしげく貌、太液ハ池の名勾陳ハ星の名をかりて后宮を名づく皆上陽宮の荒廃の風情を述

薔薇繚垣春雨裏　桃花御柳萬年枝

万年枝ハ冬青樹なり説文に梓に属すと大鼓一名ハ椿樹小名一名万年枝二月花白く子紫色なり宮園に種ゑ植ゑ万の年を見て名づく三の句ニ三の月
きり和漢両世の人の才に及ばざる所をつぎきまで味

詩意　上陽宮の漠々としてわびしき雲のたなびき草ハ繁りにしげり乱れがはしき風景の
玉みがきたる宮殿も荒く池も水草に埋れて右ハまだら
に若餅より今ハ何のその名さく知る人もなく疑ひし。薔薇ハ
垣にまかれ春雨にぬれて桃花御柳も青樹の梢を
かしたる中にみだれる万年枝のほかに残りしかな。

贈ル楊鍊師ニ　楊ハ姓鍊師ハ居士の称号注にあし

鮑溶　字ハ徳元與韓愈友

紫烟衣上繡ス春雲ヲ　清隱山書小篆ノ文

紫烟トハ紫衣を云烟ハ煙光凝りて山紫と作る紫の字の事を也春雲の
合之清隱ハ居士の居処注に委し山書ハ山にかかる其山の名を見る小篆文字新たに作る
所文字の全体小篆に接するハ古文字とはるを見るべし

明月在天ニ將ニ鳳管ヲ　夜深ケテ吹キ向フ玉晨君ニ

明月在ハ中天の月を云ね風管ハ笙の造れる吹器之玉晨君ハ道の神之玉晨君ハ
道経に曰天上太上玉晨君といく太上ハ道の子孫之道の始の月車

[illegible]　和訓[illegible]

和孫的府懐旧山　孫的府ハ孫の令と云孫的府蓋山と号の[illegible]日
一説名僧[illegible]白駒月白九霄雲と云ふ

雍陶　[illegible]

偶然客[illegible]人宿

柳先生[illegible]山

柳先生ハ陶淵明ナリ門[illegible]柳を植ヘ一度彭沢の令となれども偶然の客[illegible]人[illegible]

自起開[illegible]放白鷺

秋来見月多飯思

詩意　すゑつ孫的府ともひとり人。夕深きに[illegible]。
なをこの月ともなりぬ。[illegible]人。[illegible]
となりぬ。[illegible]に[illegible]
[illegible]山[illegible]の友をもとひ。[illegible]
煙の風[illegible]。月の[illegible]に[illegible]

名なれる[illegible]。[illegible]
なく。[illegible]
[illegible]

[illegible]日東[illegible]師　日本ハ日本ノ[illegible]

鄭谷　字ハ[illegible]愚[illegible]
[illegible]刺史鄭史[illegible]

故国[illegible]波[illegible]

一[illegible]万里[illegible]
[illegible]方丈ハ仙[illegible]室の[illegible]中[illegible]山ハ[illegible]中府農邸[illegible]

夜深雨絶松堂静

[illegible]師松堂に入て[illegible]
[illegible]

一張山[illegible]

[illegible]師[illegible]

[illegible]

詩意　昔日[illegible]唐[illegible]
[illegible]師[illegible]人。[illegible]捨て[illegible]
[illegible]

中條山よりげ[illegible]。方丈の室ふかくして。秋骨よ痩るが如し。
潮吹風よ。松の下庵面絶て。窓の雲の一むら。落も。
枯るもてらさぬ。[illegible]の[illegible]や[illegible]。[illegible]の郭言
[illegible]りしかちく化れる。

旅懐

杜荀鶴 [illegible]之杜荀之が懐を[illegible]大乃の如[illegible]天杜の神を
[illegible]とおハ他別の人と別よ有九華山故よみづから
九華[illegible]人と称と

月華日生彩度来収　山嶽色沉声暗結愁

一二の句ハ[illegible]月の[illegible]星の光和よ入く[illegible]日の色
[illegible]ふハ夢の[illegible]二の句ハ暗の一字流注[illegible]
なもなく[illegible]
の韓

寒夜灯[illegible]十[illegible]

一時に和雨到心頭

和ハ[illegible]人生篇宮中の雨の
情[illegible]

蕭意　[illegible]外て宮ひ[illegible]の[illegible]月の[illegible]
隈。雲に収る[illegible]の[illegible]の川[illegible]
寝[illegible]。和[illegible]の灯[illegible]。十[illegible]
[illegible]。居[illegible]移[illegible]七所。一時[illegible]
[illegible]。

寒別朱拾遺　[illegible]

劉長卿　[illegible]

天書遠[illegible]滄[illegible]宮

幾度偏岐病未能

天書ハ勅書ヘ流宦の宴ハ遠行を云ふ餞ハ送別を云ふ別杯ハ別れを惜む酒也

自由ハ思ふまゝ勝手を云

江海花春酒遍

紅人一曲繁金陵

玄の遍くなれるを身にして多の美人のかゝるなり心情行ふ紅人美妓

〻金陵ハ建康府楚の宋の都陵邑なり人楚の滅されしとき人民を此所に移す

楚辞ハ屈原の作

詩意　京洛の男子こゝろつゝの薄子深鬼界が酒の法人のうゝ。の某二人ハ免されて。猶ほ別れる妻妾を酒

ても男女うきなり。花も同じ。配所も同じ。所

なれ。捨て行清の情はる。酒ハ如れく美人も

舟ハ遠に漕出す。身をしと思ひ

別れ如し。

別張道士山居　張乃士仙化の名

素系　字ハ公孫会稽の人天宝の乱を避く安くに住せしも

宋の高士と自家あるなむをんでそと眺く如とし泛花の字を

八十ゴ〻て卒を

盤石窮蘿只是家

回頭看桃花

盤石ハ法列の山中の岡山和尚の座禅石ゴ〻ひ桃花ハ桃の花

蘿ハ蔦の類なり花ハ桃の花

此山桃花ハ山中の桃花ハ桃の花

いぶし

松間寂寂閑火

寂〻ハ寂しき貌仙人ハ常の人なり

彼を仙人列仙伝を引

遠眺絶来一片霞

詩意　烟蘿の縄簾紙の戸。苔むして石を蹈こゝ。

別をめぐりて。終日庭の柏樹子ばらゝて。伊豆の

本合上人として。松の下居さしこゝ。わさく山の

嬉しく折しも只一むらの紅の葉。多く黄なる中にまじりてへく
残るを愛し。

寄李渤　張籍　伝記上におあり

渤字ハ濬之李渉が弟隠ニ少室山ニ

五度渓頭躑躅紅ナリ　嵩陽寺裏講時鐘

五度渓ハ嵩山ニある山なり嵩陽寺と号して躑躅ハ植しと例を讃時の鐘ハ
講読の折の李渤が講ずるの色を花を卜まよふく見ゆの二句なり

春山処々行応好　一月看花到幾峯

嵩陽ニ三十六峯一日一峯の花を見るに一月の
日数にたらず

詩意　もろこしの奥里の奥に流れゆくしおろそかに
人あいハせじと。躑躅が花の咲ける處。嵩陽寺の
鐘の響ハ。春の山色の羊腸。遠近人の袖をまねる。

三十六の峯つき。ほど数ありとも奥ハまだ。花さき乱るに
花の紅。かつ見る送る。峯生の雲の一月ハ。
毎日枝折の花かして。又ところの花や見む。

南荘春晩　李群玉　伝記上におあり

群玉が本集には洪浦春晩とあり南荘洪浦なり
群玉が本集之此詩排より願て後の似合ふるかな
春草陰府の詩と略旅気しがたし

草暖沙長望去舟　微茫煙浪向巴丘

巴丘ハ本注に云洞庭より見ゆる所洞庭ハ古より騒人の国之屈平離騒
を似る所ある春の暖なる景色の風情を述

沅湘寂々春帰尽　水緑蘋香人自愁

沅湘ハ注に云南方の宋玉也つて春皈るとつらくく人まげもみさ尽を
述けるは春陰府の詩にかしを恨みに二妃に重て後の似なる尽し

詩意　白柏子ハ白き千の姿みそぐり。うれめ流れ

の女しハ。あ[illegible]を濯ふ絶女の也。江口の岸の川波遠。月の夜。秋の梅の雪。伊吹おろしの風さきに。郭公姫のあよぐ[illegible]。西行法師が[illegible]の岸とぞいさめて侍し。盤昌し。時去代変ぬれば。その併も波の音。もの山風吹くれば。潮引舟の[illegible]。雲よりけ[illegible]の声。かけ[illegible]の[illegible]をとづきて。[illegible]せるしく[illegible]ぬれど。[illegible]ぬ[illegible]。

長渓秋思　一本秋を愁ふ仏と成詩同時へ

唐彦謙　仏花おなじ

柳短苔長渓水流

柳短苔ちハ秋の風情を云オのちきハ時ふ合ぶて[illegible]て短きハ時ふ合ぶて[illegible]て短きハ時ふ合ぶて[illegible]て長渓の和訓[illegible]とにと侍て山岩のふる[illegible]也涙へ

雨微烟暗立渓頭

渓ハ[illegible]の[illegible]つまり流れ[illegible]を云古田の岸〜

岩書の波〜[illegible]流れ流れ

宮を移閑を前山去

閑〜ハ[illegible]〜[illegible]〜[illegible]自然ハ書[illegible]

常曲日西之おるおつ

詩意　雑波城江の柳の風。柳[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]て。雲の姿も三つ張ぶ山。芦の[illegible]の姿なれや。況ふ生の雲原とぞきけ[illegible]も文に[illegible]ぶ姫。田舎の[illegible]の雨ふ。寝ふ行方の山路。[illegible]川[illegible]ふ[illegible]。笠屋の秋の[illegible]。[illegible]の浦の[illegible]なくけり。

隋宮　[illegible]ふ毒〜隋煬帝の[illegible]る所

艶宮　仏花おなじ

柳塘烟起日西斜

竹浦風回雁渡沙

楊帝春遊古城上

楊帝春遊より楊列まて敷る田中家西を仕り其頃る柳をうゑ竹浦も柳列よりうすきうゑ

懷古家茅茅滿人家

四の句は一篇の秀逸にして者深し江列君ヶ畑と云山中より雁高歌は
の位第ひは頃さを行ひてのちに位せる所作ひつ手位今は柳列
花畠の後と云ひる山菊をひつ[illegible]る菊をまて[illegible]所の
[illegible]菊をとりて家くうも和漢さこに異なるぞ

詩云　西近の方にさ波や。柳といの所よりの
の色すぎ牧ひつて。戸津坂中の夕湖。雲よ西日の
長岑山。庵家濱の白砂。浪田の[illegible]。
天の帝の文づくり。落かの柳ハ[illegible]。紫菜
茅菊の色はを。[illegible]
ぞ[illegible]なる。

綺山宮　市道より南一江[illegible]山の
[illegible]

王建　[illegible]

玉樓傾側彩墻宮

車馬青山遶故宮

武帝玄來紅袖尽

世花芙蓉領芙風

漢の武帝をきて南附玄宗を訪ひる何しあり芙蓉を述紅袖ハ美女を
云四句は芙蓉赤白の色ハ云和ひ[illegible]
[illegible]川の図　[illegible]

詩云　柳の紅は日花よりも美しく。故ちの梅門燈よ燈れ。
かくむく新の志のぶ茅。築地くづまく[illegible]。
[illegible]山。[illegible]柳が岳よりかとゆく。千[illegible]せ
を行ふ[illegible]。作[illegible]なく[illegible]。[illegible]女のうか

づる柳もなし。空しき山本湖の古堂。主なし。僧の
撥平り。麦の速き。そよぐ。風は秋ぶるこゝもの。

送三義帰西域　三義ハ人の名にて行ゞ紹律論の三つと行ゞ傳を
三義法師と云。西域ハ西方なり

李白洞　李洞ハ雍州の人。避世入蜀。蜀石門山に居。詩を
ものゝ傳を落く頂載して義空傳伝

十萬軍行西雁　沖中隔接隨教

ちあらう西域の人十万八千里ちむかひの人のきくと云ふ雁の
流沙のきをと行くて人遠ひ死をそのタ一こゝ雁といつめ
して西域の西の雁の一つ人ひとつ雁を先を記をそ毎三義比和よ梵語
の心経をよんで教ふ授ける方法をいつくしみ

月落長安夜漏

西天到日頭鷄白　西天ハ西方の白ハ別くは高松を云
三の白ハ別つきこゝ風の白をきを云

詩意　千里秋くびようけて。雲孤に去る方西。湖の
芦後。迴門の沒。何波の修戸の樺桂。つぎもちゝ

沖の鷗。鷺の足入れのはしゝ。毎。行。来。あ。沒。多の果。
立かしるこゝの老の波。ぞ。めく。頭。白かゝ。むと。ゆ。
りむ。ち。かゝ。て。月。を。松。の。西。の。景。中。夜。を。つ。ら。ら。
霜の後。きを。西。る。ん。北。ら。ら。也。

長信秋詞　長信宮ハ漢の成帝の皇后の宮にて帝の祖母を云
趙飛燕趙昭儀姉妹ハ美人を奪ひ親使作君色て
陽ら。月。を。方。伝。ま。な。仕。ま。ら。ま。を。低。ム。己。ら。月。ま。比。し。く
朝。ま。て。秋。の。宮。ハ。親。ム。が。家。の。ま。ら。く。ム。風。園。扇。の。歌。ま
ら。く。秋。の。宮。を。月。色

王昌齢　仙化おまの

奉帝命金殿閑　因招周扇云能徊

平四ハ夜の明けて風雨を云事ハ帝を云
扇ハ扇とも云る。周扇ハ班使作が周扇の歌
能徊ハ夢よりあらしとなるとゝ山
ゝらやまとふと川ゝ風光ゝ

玉顔ハ不及寒鴉色ニ　猶帯ビ昭陽ノ日影ヲ来ル

昭陽ハ宮の名昭儀が居れる所昭陽の日影ハ天子の恩光を云寒鴉ハ夕陽の
光を背ひ来れ共姐女ハ鴉より劣(オト)りと云心也姐女みづから玉顔と云ハ
昌齢が作れるなれバ卑き寒鴉の色をさへうらやむ玉顔といへる歎し
き心詞也夕ぐれの如くなる寒き宮にとし迷ひ昭陽の日影と云所に泣きいき
たり見ゆるうちにも我入しく
なるべし

詩意　萌(モエ)るも枯るも同じ草ば。いづれか秋にあはでと
よめる。妓王(ギワウ)ハ仏に寵をとられ。娼となれる身のうへぞ。
六波羅殿の様となりて。上帷子(ウハ)の袖色こぞるの障泥(アヲリ)の
大堂扇。擁(ホコ)りまぶれぞ哀なる。寝殿の庭の様なり。
まどこにいろもふ夕がほとて。君色は我なれなつかしき。
徘徊(ヌヲ)のみ化して夕陽の色をぞ詠みけむ。